

# 複合的変化事象における図と地の関係

## — 3つのタイプの結果構文のマクロ・イベントという観点に基づく分析

新妻明子

### 1. はじめに

本稿では、鈴木 (2011) における状態変化と位置変化が両立する複合的変化事象において、Talmy (1991, 2000) の提案するマクロ・イベントの観点から分析を試みることによって、構文における図 (figure) と地 (ground) の統語へのインターフェイスについて考察する。ここで分析する対象となる構文は、鈴木 (2011) の分析に基づいて、(A) 内部移動の結果構文、(B) 状態変化動詞に基づく結果構文、(C) 見せかけの結果構文の3つのタイプとする。状態変化が位置変化と平行性を持つとするマクロ・イベントの観点からは、これらの複合的変化事象を同様に概念化するのは不可能であると予測するが、認知的な観点から考えると図と地の関係は統語構造や意味において具現化されているはずである。これらの構文における Talmy (1991, 2000) のマクロ・イベントの概念化を再考するとともに、それぞれの事象において図と地がどのように捉えられているかを明示することにより、統語構造との関係について探っていく。

### 2. 状態変化と位置変化が両立する複合変化事象

鈴木 (2011) によると、単文内では一般には許されないとされる状態変化と位置変化が両立していると思われる複合的変化事象について、(A) 内部移動の結果構文、(B) 状態変化動詞に基づく結果構文、(C) 見せかけの結果構文の3つのタイプの結果構文を分析している。そして、これらの構文に共通する特徴として、状態変化と位置変化をそれぞれ表す述語 (動詞と結果表現) が、「図 (figure)」と「地 (ground)」という関係に基づく変化主体の再解釈に応じて、関連はあるが異なる叙述対象を持つと論じられている。<sup>1</sup> 状態変化と位置変化が両立する複合的事象変化における動詞と結果句の組み合わせは、以下の3タイプである。

(A) 内在的内部構造に基づく移動の結果構文：

動詞 (位置変化) + 目的語 (内部構造あり) + AP (状態変化)

(1) a. She slid the window shut.

b. He dropped his mouth open.

(B) 状態変化動詞に基づく結果構文：

(B1) 動詞 (状態変化) + 選択目的語 + PP (位置変化)

(2) a. He broke the eggs into the bowl.

<sup>1</sup>鈴木 (2011) は「部分 (part)」と「全体 (part)」の可能性も示唆しているが、本稿では「図 (figure)」と「地 (ground)」という関係に焦点を当て、部分と全体については図と地との関係において第5節で分析する。

b. She melted the ice cream onto her shirt.

(B2) 動詞 (状態変化) + 非選択目的語 + PP (位置変化)

- (3) a. He broke a leg off the table.
- b. He scared the secret out of her.

(C) 見せかけの結果構文：

動詞 (形状変化) + 目的語 (素材) + AP (状態変化) + PP (位置変化)

- (4) a. She piled the books high up to the ceiling.
- b. He spread the butter thick on the toast.
- c. She chopped the parsley fine into a bowl.

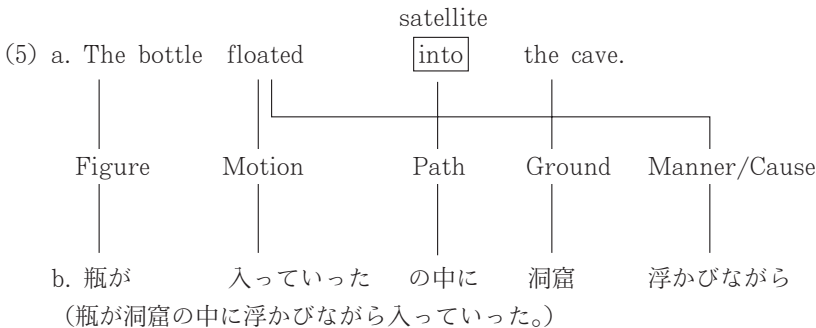
(鈴木 2011:32-33)

また、単文内で状態変化と位置変化が両立する条件として、変化主体に関して、世界知識に基づく内在的、もしくは文脈依存的な内部構造に基づく「図と地」という概念上の再解釈が前提条件となっているということも指摘している。ここでいう「図」に対して、結果句が叙述的解釈を持つ所以とは何かという点については、統語構造上では説明が困難であると思われる。このような現象に関与しているスキーマの可能性を探るために、Talmy (2000) で提案されているイベント統合の概念を取り上げる。

### 3. Talmy (2000) におけるイベント統合

#### 3.1. 移動表現のタイポロジー

Talmy (1985, 1991, 2000) によると、移動表現を構成する要素は、Figure (図), Ground (地), Motion (移動), Path (経路), Manner (様態), Cause (原因) の5つであると述べられている。さらに、Talmy (2000) では、移動事象は経路によって「枠付け」されており、その枠付けが動詞によって行われるか、その付随要素 (satellite) によって行われるかで言語を分類している。英語は、移動が付随要素によって枠付けされる「付随要素枠付け言語 (satellite-framed language)」に分類され、移動が動詞によって枠付けされる「動詞枠付け言語 (verb-framed language)」には日本語、スペイン語などが含まれると述べられている。次の例文で英語と日本語を対比してみよう。



英語では、動詞の float が表すのは移動事象とその様態であり、経路を表すのは付随要素 into であるが、日本語では、「入る」という動詞が移動事象と経路を表し、様態を表すことはできないということになる。

さらに、この構成要素によるイベント複合体が高次の概念複合体を持ち、それを「マクロ・イベント」と呼び、状態変化が一つのイベントタイプとして移動と平行していることを示している。マクロ・イベントの概念構造について次の節で述べる。

### 3.2. マクロ・イベント

はじめに、イベントという概念はどのようなものか示す。Talmy (2000) ではイベントの概念化を次のように説明している。

概念分割および事物性付与という一般的な認知プロセスの働きによって、人間は知覚や認識において、空間であれ、時間であれ、あるいは他の領域であれ、本来連続体であるものの一部分を境界で囲み、その境界内の切り出された部分に単一の事物としての資格を与え、そのような事物の一つのカテゴリーがイベントとして知覚、認識される。そのような事物には、その境界内にそれが何であるかを示す質的領域の少なくとも一部と、同じように認識された時間的連続体の一部の連続的な相関関係が含まれる。

(坂原 2000:349-350)

このことから、私たちが一連の出来事であると認知した事象が1つのイベントとして表されると考えられる。

では、このような概念がどのように統語に表されるのだろうか。Talmy は、単一イベントは一つの統語節によって表すことができるとした上で、複数の節をもつ統語構造で表されるようなイベントでも、それを単一的と概念化し、単節で表すように変換する一般的な認知プロセスが働いていることを示唆している。このことをイベント統合と呼ぶ。以下の例を見よう。

(6) a. The candle went out because something blew on it.

(何かが吹いたのでろうそくが消えた)

b. The candle blew out.

(ろうそくが(吹かれて)消えた)

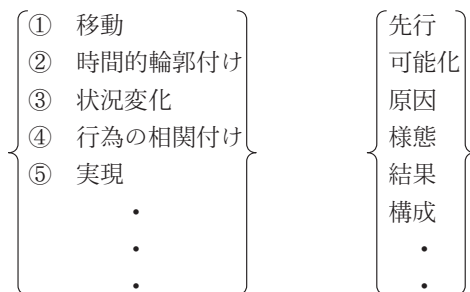
(辻 2002:7)

上の例文(6a)では、「ろうそくが消えた」という結果事象と「ろうそくに何かが吹いた」という原因事象とを、それぞれ主節と従属節という別々の節で表している。一方(6b)では、原因事象を blew という動詞が、結果事象を out という付随要素が担い、単一の節で表している。このように、単一の動詞句に圧縮することで概念的にも2つの事象要素を高次の事象に一体化させることをイベント統合<sup>2</sup>と呼んでいる。

<sup>2</sup>『認知言語学キーワード事典』(辻 2002)では「イベント抱合」という用語を使用しているが、本稿では「イベント統合」という用語に表記を統一する。

また、言語の基底にある概念構成において、根本的で広く行き渡ったあるタイプの概念複合体が存在し、それを「マクロ・イベント」と呼んでいる。つまり、マクロ・イベントとは、上記のように単一イベントに概念統合できる複合イベントである。マクロ・イベントの概念構成は共イベント、枠付けイベントおよび共イベントの枠付けイベントに対する補助関係から構成され、次のように示される。

〔動作主 因果連鎖〕〔イベント〕枠付けイベント ←補助関係 〔イベント〕共イベント



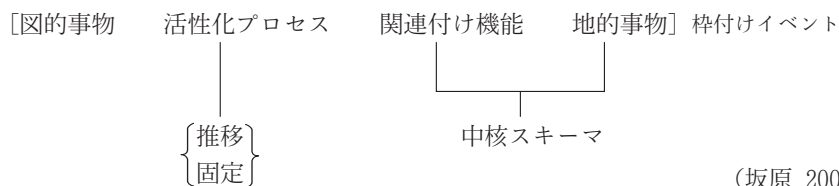
(坂原 2000:357)

【図1】マクロ・イベントの概念構成

ここで〔動作主 因果連鎖〕が括弧付けで表されているのは、前述した The candle blew out. のように動作主が明示されない非動作主的マクロ・イベントと、I blew the candle out. のように動作主が明示される動作主的マクロ・イベントの2種類が考えられるからである。

このように、マクロ・イベントは移動だけでなく、他の点で全く異なる5つのタイプのイベントにも関与する。Talmy (1985) では、「状態変化」が一つのイベントタイプとして言語において移動と平行していることが示されている。このタイプに関しては次節で述べる。

また、枠付けイベントは、概念領域にスキーマ的構造を付与する機能を果たし、図的事物、活性化プロセス、関連付け機能、地的物事という4つの成分から構成される。概念構成を示すと次のようになる。



(坂原 2000:358)

【図2】枠付けイベントの概念構成

イベント複合体のスキーマ的な中核部分を典型的に主動詞か「動詞の付随要素 (satellite)」のどちらかで表現するかに基づいて、言語が2つの類型論的カテゴリーに分かれる。Talmy (1985, 1991) で提案されているように、「動詞の付随要素」とは、「名詞補部以外で動詞語根と姉妹関係に立つあらゆる構成素からなる文法カテゴリー」である。中核スキーマを付随要素に写像するのを特徴とする言語は、「付随要素枠付け言語 (satellite-framed language)」と呼ばれ、最も徹底したものではないが、基本的にはこれに属する言語とされている。付随



(8) a. 非動作主的マクロ・イベント

[he “MOVED” TO DEATH] WITH-THE-CAUSE-OF [he choked on a bone]  
He choked to death on a bone.

b. 動作主的マクロ・イベント

[I “AMOVED” him TO DEATH] WITH-THE-CAUSE-OF [I burned him]  
I burned him to death.

(坂原 2000:382-383)

ここでは、「推移のタイプ+状態」が中核スキーマを成している。推移のタイプとは、TOで表されるような物や状況が属性に対してもつ関係の方向のことである。中核スキーマを表す連鎖 TO DEATH は、英語では to death (死に) という句で具現化され、この句全体は、枠付け付随要素に相当すると考えられる。DEATH は物や状況の属性であるため、地として概念化されると考える。すなわち、優先される枠付けイベント表示では、属性に関連する物や状況が図となり、属性が地となる。Talmy の定義する図と地の一般的な概念は次のように示されている。

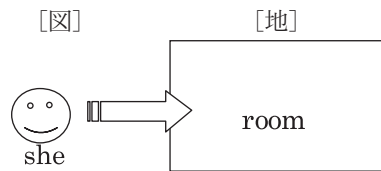
The general conceptualization of Figure and Ground in language

The figure is a moving or conceptually movable entity whose path, site, or orientation is conceived as a variable, the particular value of which is the relevant issue.

The Ground is a reference entity, one that has a stationary setting relative to a reference frame, with respect to which the Figure's path, site, or orientation is characterized.

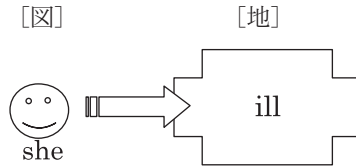
(Talmy 2000:312)

例えば、She came into the room. という移動のマクロ・イベント構文に関しては、移動する実体である she が図であり、参照となる実体である room が地ということになる。イメージを表すと次のようになる。



【図4】 She came into the room. の図と地

一方、She became ill.のような状態変化のマクロ・イベント構文に関しては、ill という属性が安定した状況に当てはまり、変化する実体であるのは she ということになる。また、前述したように移動表現と平行性を示すということを考慮すると、次のようなイメージとして捉えることができる。



【図5】 She became ill. の図と地

このマクロ・イベントにおける図と地の概念化と統語への具現化に関する Talmy の提案に基づいて、次章では3つのタイプの結果構文におけるマクロ・イベントについて考察する。

#### 4. 3つのタイプの結果構文におけるマクロ・イベントの概念構造分析

第2章で述べたように、鈴木（2011）では状態変化と位置変化が両立する複合的变化事象として、(A)～(C)の3つのタイプの構文に分類した。本章では、これらの3つのタイプの結果構文について、具体的な概念構造を Talmy の理論に基づいて示し、そのイベントにおける図と地を分析することを試みる。

##### 4.1. 内部移動の結果構文

Talmy (1991) のマクロ・イベントに従って、2章で見た例文の概念構造を表すと次のようになる。

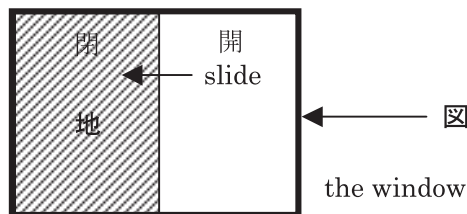
(9) She slid the window shut.

[she AMOVE the window TO POSITION-ACROSS-OPENING] WITH-THE-CAUSE-OF [she slid it]<sup>3</sup>

(10) He dropped his mouth open.

[he AMOVE his mouth TO POSITION-ACROSS-CLOSING] WITH-THE-CAUSE-OF [he dropped it]

これらの例文における中核スキーマは「経路+地」であり、“TO POSITION-ACROSS-OPENING” で表されているように、「開いている部分を閉じた位置に」という経路と地の組み合わせであると述べられている (Talmy (2000))。例えば例文(9)を図で示すと次のようになる。



【図6】 She slid the window shut.

<sup>3</sup>I kicked the door shut. の概念構造が [I AMOVE the door TO POSITION-ACROSS-OPENING] WITH-THE CAUSE-OF [I kicked it]と示されていることによる。( )も同様。(Talmy (2000:368))

しかし、ここで問題点となるのは、例文(9)において図と捉えられるのは the window であるため、図では太枠部分に相当するにもかかわらず、「開いている部分」の移動もしくは状態変化とみなしている点である。また、(9)で示されている概念構造における枠付けイベントを分析すると次のようになる。

- (11) [ 図的事物 活性化プロセス 関連付け機能 地的事物 ] :  
 [ the window 推移 TO POSITION-ACROSS-OPENING ]

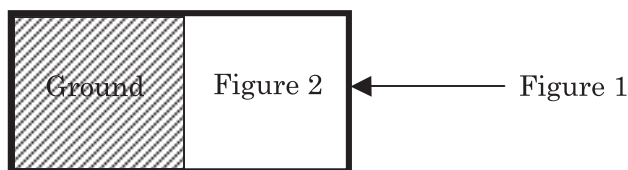
ここで POSITION-ACROSS-OPENING と示されていることから、枠付けイベントにおける地的事物そのものが OPENING と POSITION-ACROSS-OPENING つまり CLOSING という内部構造を持ち、OPENING という参照点を表しているといえる。そして、例文(9)における図は窓の可動部ということになる。すなわち、地的事物がさらに下のような図と地をもつということである。

- (12) 地的事物 : [ 可動部 (図) OPENING (地) ]

これは Iwata (2008)、岩田 (2010) で提案されている「内部移動 (internal motion)」というカテゴリーに合致すると考えられる。Iwata (2008) では、open/shut が結果述語となる構文に関しては他の結果構文と区別し、内部移動と状態変化が同時に発生する現象としている。鈴木 (2011) もまたこの分析を正しいとして、状態変化と位置変化が両立する複合的变化事象のタイプの1つであると結論づけた。

以上の分析にもとづいて、内部移動の結果構文における枠付けイベントを概念化したものを修正し、図と地を表すと次のようになる。

- (13) [Figure 1 推移 TO a STATE [MOTION of Figure 2]]



【図7】内部移動の結果構文におけるマクロ・イベントの図と地

Figure 1 において、実際に移動する可動部を Figure 2 とする。Figure 2 が Ground の位置に移動すれば shut、Ground から離れる方向に移動すれば open という Figure 1 の状態を表すことになる。すなわち、Figure 1 は状態変化を、Figure 2 は移動を表す事象であるといえる。

#### 4.2. 状態変化動詞を伴う結果構文

次に、状態変化動詞を伴う結果構文のマクロ・イベントを Talmy の概念構造を用いて表すと次のように考えられる。



(14) a. She broke a leg off the table.

?[she “AMOVED” a leg OFF the table] WITH-THE-CAUSE-OF [she broke it]

(15) a. He scared the secret out of her.

?[he “AMOVED” the secret OUT OF her] WITH-THE-CAUSE-OF [she scared it]

ここで問題となるのは、動作主の因果連鎖を表す [she broke it] や [she scared it] の部分において it の指すものが a leg や the secret ではないことである。これを修正し、枠付けイベントと共に表すと次のようになる。

(14) b. She broke a leg off the table.

[she “AMOVED” a leg OFF the table] WITH-THE-CAUSE-OF [she broke the table]

c. 枠付けイベント

[ 図的事物                    活性化プロセス   関連付け機能   地的事物 ]  
[ a leg (of the table)   推移                            OFF                    the table ]

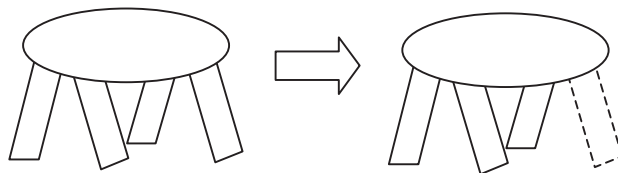
(15) b. He scared the secret out of her.

[he “AMOVED” the secret OUT OF her] WITH-THE-CAUSE-OF [he scared her]

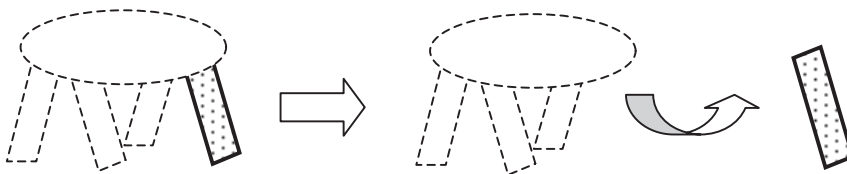
c. 枠付けイベント

[ 図的事物                    活性化プロセス   関連付け機能   地的事物 ]  
[ the secret (of her)   推移                            OUT OF                    her ]

(14)の例文を見てみよう。She broke a leg off the table. という文が表す事象は、テーブルの脚が外れた状態に変化するという点では状態変化を表し、テーブルの脚がテーブルから移動するという点では位置変化を表す。図で示してみよう。

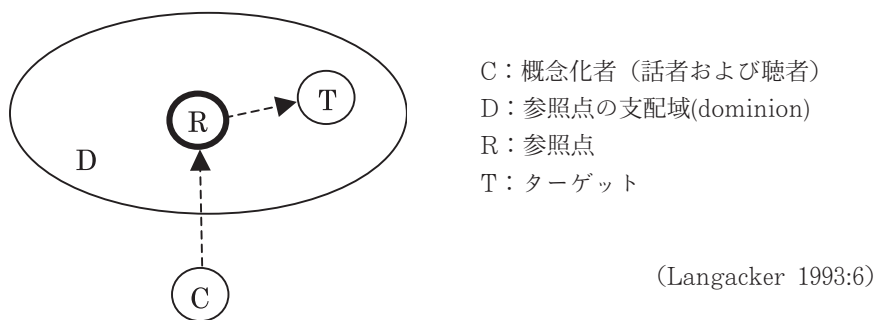


【図 8 a】 She broke a leg off the table. の状態変化



【図 8 b】 She broke a leg off the table. の位置変化

このように示してみると、【図8a】が概念構造における全体を表し、【図8b】が枠付けイベントを表していると解釈することができる。さらに、【図8b】の変化が起きたことが原因となって【図8a】の変化が起こるといった関係となっている。そもそも Talmy は2つの事象を1つにイベント統合するとしながら、状態変化と位置変化を平行するものと述べているため、このような2つの事象が同時に起こるタイプに関しては従来の概念構造では説明しきれない点があるように思われる。しかし、図的事物に関して概念構造にも示したように、例えば(14)の a leg は椅子の脚でも彼女の脚でもないので、a leg of the table のように the table を参照点として解釈する必要がある。参照点構造を以下に図示する。

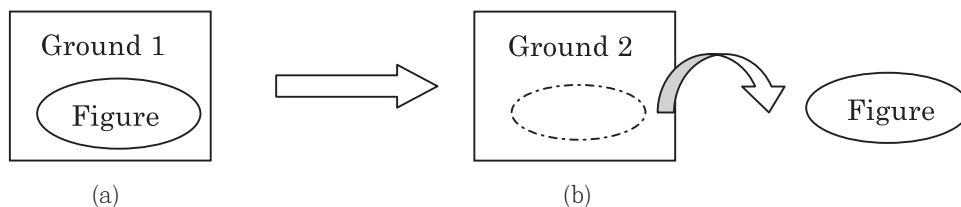


【図9】参照点構造

A leg of the table の場合、参照点 (R) はテーブルでターゲットはテーブルの脚ということになる。参照点関係は基本的には所有構造という本質的な意味を持っており、参照点に心的にアクセスし、参照点をもとにしてターゲットの理解が可能になると言われている。状態変化動詞を伴う結果構文における枠付けイベントの図的事物ではこのような関係が成り立つことが前提となると考えられる。言い換えると、図的事物と地的事物に所有構造が成り立つということである。また、鈴木 (2011) が、動詞行為からの強いインパクトによって、本来単体であった変化主体が図と地の関係に分離し、前者が後者から離脱するという位置変化が生じていると述べているように、共イベントにはインパクトを与える原因となる動詞行為、枠付けイベントには分離する方向への移動という条件が必要となる。

したがって、状態変化動詞を伴う結果構文におけるマクロ・イベントを概念化すると、次のように表すことができる。

(16) [Agent “AMOVED” Figure OFF/OUT OF Ground 1] WITH-THE-CAUSE-OF  
[Agent MADE AN IMPACT ON Ground 1]



【図10】状態変化の結果構文におけるマクロ・イベントの図と地

状態変化動詞の場合には、【図10a】から【図10b】への事象の状態変化を表すことになるため、Ground は Ground 1 から Ground 2 の状態へ変化すると考える。しかし、Talmy の枠組みではこの点について概念化することが困難であり、それは状態変化が抽象的な移動であるという前提が原因となっている。つまり、ひとつのマクロ・イベントにおいて状態変化と位置変化が両立しているため、(16)のような概念化では説明できない不十分な点が生じるということになる。

#### 4.3. 見せかけの結果構文（形状変化の動詞）

鈴木 (2011) によると、見せかけの結果構文では形状変化動詞による行為を伴う。形状変化動詞とは、1回1回の行為の積み重ねが累積的に素材に働きかけて特定の形状を持つ産物を生じさせる結果含意動詞であるということが出来る。このようなタイプの構文においても4.2で述べたような問題点が予測できるが、Talmy の概念構造を利用してマクロ・イベントを表してみると次のように考えられる。

(17) a. She piled the books high up to the ceiling.

[she “AMOVED” the books [(the pile of) books “MOVED” TO a STATE [BEING high] up to the ceiling] WITH-THE-CAUSE-OF [she piled them]

b. 枠付けイベント

【図的事物	活性化プロセス	関連付け機能	地的事物】
[the books	推移	up to	the ceiling]
[the pile of books	推移	TO	a STATE [BEING high]

(18) a. He chopped the parsley fine into the bowl.

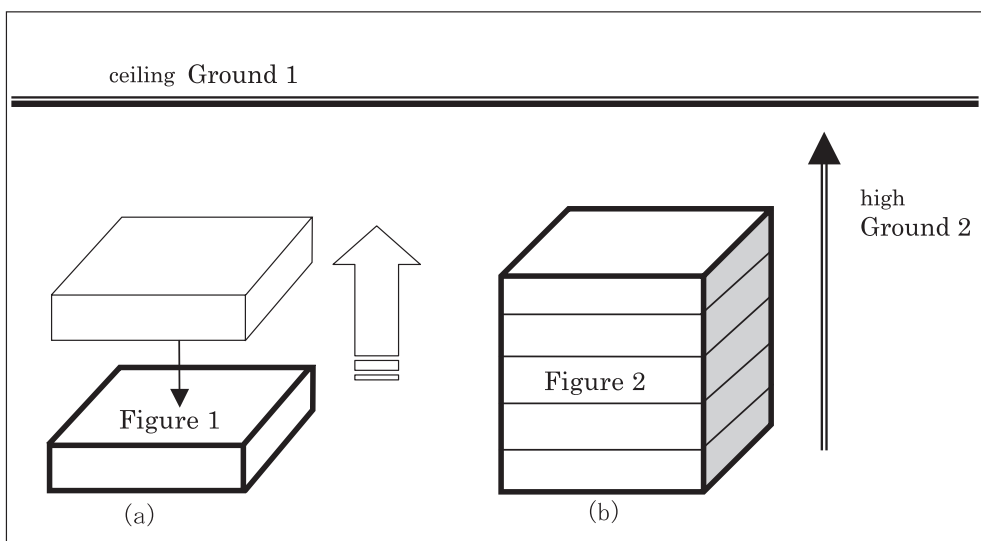
[he “AMOVED” the parsley [(the chops of) parsley “MOVED” TO a STATE [BEING fine] into the bowl] WITH-THE-CAUSE-OF [he chopped it]

b. 枠付けイベント

【図的事物	活性化プロセス	関連付け機能	地的事物】
[the parsley	推移	into	the bowl]
[the chops of parsley	推移	TO	a STATE [BEING fine]]

ここでの問題点は、1つのイベントとして捉えられるにもかかわらず枠付けイベントを2つに分けて示さなければならない点であるが、それは移動と状態変化が同時に起こっているためである。(17a)や(18a)に示してあるように、マクロ・イベント内が二重構造になっていると考える。また、それぞれの事象によって図として捉えられるものは、形状変化における素材としての事物か結果産物であるかという違いがあるため、2つの枠付けイベントにおける図的事物の間には素材と結果産物という関係が成り立つことが条件となる。3.3. で述べたように、属性に関連する物や状況が図となり、属性が地となることから、状態変化の事象に関しては結果産物が図となり、その状態が地となると分析できる。

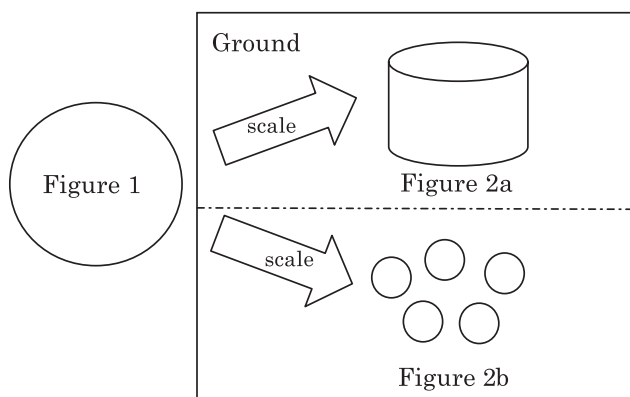
以上のことを踏まえて例文(17)における図と地を表すと次のようになる。



【図11】 (17) She piled the books high up to the ceiling. におけるマクロ・イベントの図と地

Figure 1は1冊1冊の本に相当する。それがGround 1である天井の方向に積み重なっていくという移動を表している。一方、それらの本が積み重なった結果産物となるのがFigure 2である。Figure 1とFigure 2の間には素材と結果産物という関係が成立している。Figure 2が高いという状態はFigure 2の属性であり、そのような属性を指定するスケールとなるのがGround 2となる。【図11】では図と地と捉えられている対象が分かりやすいよう(a)と(b)の2つに分けて示したが、(a)は(b)に包括することができるため、1つの事象として扱うことが可能になると考えられる。

形状変化動詞は、結果産物の形状特性に関する最小変化の累積的結果を含意しており、動詞スケールは抽象的な2点スケールで、状態変化と位置変化に関しては、一体性が変化する方向性(上方・下方)以外は具体的属性が未指定であるため原則として両義的であると鈴木(2011)は分析している。これを考慮に入れて形状変化動詞の結果構文における図と地を图示すると下のようになる。



【図12】形状変化動詞の結果構文における図と地

この図において Figure 1 と Figure 2 は素材と結果産物の関係である。矢印が示している scale は、形状変化動詞の表す事象がどちらの方向（上方・下方）に変化したかという変化プロセスを表し、その事象が起こっている場所が ground となるため、Figure 1 から Figure 2a あるいは Figure 2b への移動とも捉えられる。したがった一つの事象として捉えられるため、状態変化と位置変化が両立することは可能であるといえる。

## 5. 図と地の再解釈とメトニミー

Talmy が提案するマクロ・イベントの概念は、構文ごとにアドホックな部分はあるにせよ、どんな言語においても一對の図的事物と地的事物を1つの事象の構成要素として統語に具現化されるとしていることは、図と地の統語へのインターフェイスにおいて重要な意味を持つと思われる。これまでに見てきたように、概念化されたマクロ・イベントにおいても図的事物と地的事物の現れる位置は維持されているといえるだろう。鈴木 (2010) は、単文内で状態変化と位置変化が両立する条件として、変化主体の内部構造に基づく「部分と全体」あるいは「図と地」という概念上の再解釈が前提条件となっているということを指摘しているが、これはメトニミーとして解釈できると考えられる。メトニミーは単一の領域内における隣接性に基づくとされており、次のような全体・部分の関係も含まれる。<sup>4</sup>

- (19) a. 手を貸す。([部分] 手→ [全体] 人)  
 b. 赤鉛筆 ([全体] 鉛筆→ [部分] 鉛筆の芯) (谷口 2003:124)

したがって、必ずしも統語構造上の項として具現化するわけではない図に対して結果句が叙述的解釈を持つということの動機付けとして、起こった事象において最も際立っている事物が図的事物として目的語の位置に選ばれ、メトニミーによる解釈がスキーマとなって結果句が叙述している事象の解釈に寄与していると考えられる。さらに、見せかけの結果構文において形状変化動詞が表す事象もメトニミーという視点から分析すると、動詞が示す行為が結果産物を作るという「原因と結果」の隣接性がある。例えば、「受話器をとる」行為がその後に続けて起こる「電話に出て話す」という行為を意味するように、She piled the books. という行為が She made the pile of books. という意味を表すと考えると、結果句が叙述するのは当然 the pile of books の状態ということになる。Talmy (1991) は、単一イベントは1つの統語節によって表すことができるとした上で、複数の節をもつ統語構造で表されるようなイベントでも、それを単一的と概念化し、単節で表すように変換する一般的な認知プロセスが働いていることを示唆しており、メトニミーはこの認知プロセスに大きく関わっているのではないかと思われる。

## 6. おわりに

Talmy (1991, 2000) のイベント統合におけるタイポロジーは、どの言語においても図的事物と地的事物がマクロ・イベントの語彙化パターンに基づいて統語構造に表され、図と地

<sup>4</sup>全体・部分の関係に基づく比喩をシネドキシに含める用語法があるが、日本では佐藤 (1978)、瀬戸 (1986) 以来、現実世界における全体・部分関係に基づく比喩をメトニミーに属させる用語法が一般的になっている。(辻 2002:35)

を事象の構成要素として概念化した点において、示唆に富んでいるといえる。しかし、状態変化を抽象的な移動とみなし、位置変化と状態変化を平行的に扱っている点には問題があり、本稿で論じた状態変化と位置変化が両方成立するような複合的な変化事象を扱うことには無理が生じる。また、付随要素 (satellite) の詳細が不十分であり、動詞のタイプによる事象の違いについても、構文ごとのアドホックな分析となっていることは否めない。特に見せかけの結果構文で明らかになったように、位置が変化することによって状態も変化するという事象は、場所理論<sup>5</sup>の適用には限界があるように思われる。

一方で、4節で論じたように、マクロ・イベントの枠組みを利用して3つのタイプの結果構文における図と地を図示したことによって、これらの結果構文の事象における図と地として捉えられる事物や属性の関係や、図的事物や地的事物として捉えられるものにおける「全体と部分」という関係が明らかになった。その上で、変化主体の内部構造に基づく「全体と部分」という再解釈が成立するか否かという点が、状態変化と位置変化という二重の叙述関係が両立する条件であるという鈴木 (2011) の分析は妥当であるといえる。それに加えて、5節で述べたように、変化主体の「全体と部分」という再解釈のプロセスにはメトニミーによるスキーマが作用すると考えられるが、それがどのようなメカニズムになっているのかは今後の研究課題としたい。

このように、本稿では、状態変化と位置変化をそれぞれ表す述語が、図と地という関係に基づく変化主体の再解釈に応じて、関連はあるが異なる叙述対象を持つと論じられてきたことに対して、3つのタイプの結果構文におけるマクロ・イベントを分析し、図と地を図示して叙述対象が事象においてどのように捉えられているのかを明示しようと試みた。それぞれの結果構文における述語の叙述対象は異なっているが、全体と部分という関係が成立することが条件となり、それによってメトニミーとしての解釈の可能性を示唆した。2つの変化が1つの事象として捉えられるような複合的な変化事象においても、その事象を構成している事物が認知的にどのように捉えられているかということが、統語構造に現され、意味解釈にも大きく寄与すると考えられるのではないだろうか。

#### 【参考文献】

- Iwata, Seiji. 2008. "A Door That Swings Noiselessly Open May Creak Shut: Internal Motion and Concurrent Changes of State," *Linguistics* 46, 1049-1108.
- 岩田彩志. 2010. 「Motion と状態変化」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 No.5, 27-52. 東京: ひつじ書房.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 2005. *Argument Realization*. Cambridge University Press, New York.
- 坂原茂 (編). 2000. 『認知言語学の発展』東京: ひつじ書房.

<sup>5</sup>場所理論の中心となる仮定は次のようになる。

The localist hypothesis: all verbs are construable as verbs of motion and location. (Levin & Rappaport Hovav 2005:80)

場所理論では、空間移動と位置の概念に基づく分析が、他の意味領域 (状態変化、所有関係など) の事象を理解する上でも比喩的・拡張的に利用されると考える。(鈴木 2011)

- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』 東京：講談社学術文庫.
- 鈴木亨. 2011. 「複合的変化事象の意味論に向けて—状態変化と位置変化が両立するとき」  
『山形大学人文学部研究年報』 8, 19-37.
- 瀬戸賢一. 1986. 『レトリックの宇宙』 東京：海鳴社.
- Talmy, Leonard. 1985. “Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms”  
in Shopen, Timothy, 1985, *Language typology and syntactic description: Grammatical  
categories and the lexicon. Vol.3*, 57-149. Cambridge, England Cambridge University  
Press.
- Talmy, Leonard. 1991. “Path to realization: A typology of event conflation”. Berkeley  
Working Papers in Linguistics, 480-519.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics. Vol.I: concept structuring sys-  
tems. Vol.II: Typology and process in concept structuring*. MIT Press, Cambridge,  
MA.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 英語モノグラフシリー  
ズ20. 東京：研究社.
- 辻幸夫（編）. 2002. 『認知言語学キーワード事典』 東京：研究社.